

「木場の角乗」と私

林野庁木材産業課長 福田 淳

はじめに

「木場の角乗」は、江東区木場に伝わる伝統芸能で、水面に浮かんだ幅30cm、長さ5mほどの角材の上で、バランスを取りながら、各種の技を披露するものです。東京木材問屋協同組合の皆様であれば、一度は見聞きしたことがあるかと思います。

私は、現在、林野庁で木材産業課長を務めておりますが、シーズン中の週末には、「東京木場角乗保存会」(会長：加藤元一)の一員として、「木場の角乗」の技の継承に励んでいます。

本稿では、木場と川並の歴史を概観した上で、「木場の角乗」の継承活動と、私の経験を紹介したいと思います。

1. 木場と川並の歴史

「木場の角乗」は、江戸・東京の木材産業の中心地であった「木場」で、水上での木材の輸送・流通に携わってきた職人集団「川並(かわなみ)」の腕自慢・余技として発達してきました。

木場は、徳川家康が、江戸城築城に当たり、遠江や三河などから材木商を呼び寄せたことに始まります。木場では、堀割に沿って木材業者が集中し、各地から船で運ばれた木材が集積され、堀割を通じて、水上での取引・輸送が行われました。そこで、水上での木材の仕分け、輸送、保管、検量などを一元的に担っていたのが「川並」です。川並は、河川管理や治安維持にも携わっていたと言われ、単なる下働きではない独立性と高い誇りを持っていました。

木場では、明治以降、鉄道網の発達、輸入材の増加に伴い、木材の取扱量が急激に伸びていきましたが、昭和30年代以降、地盤沈下や騒音・粉塵などによる環境悪化が問題になりました。このため、沿岸部に大規模な「新木場」が造成され、昭和49年から加工業者の移転が始まりました。

しかし、並行して、木材の輸入形態が丸太から製品へと移行していったことから、移転直後から木材の取扱量が減少し始め、新木場の木材産業は急速に縮小していきました。今では、新木場の水面には、一本の木材も浮いておらず、川並の仕事も消滅してしまいました。

2. 「木場の角乗」の継承

このような中、「東京木場角乗保存会」では、川並たちが伝えてきた「木場の角乗」の技を後世に伝えるべく、毎年5月から、都立木場公園で稽古を重ね、10月の「江東区民まつり」で年一回の披露を行っています。現在の会員数は20名程度です。元川並は、会長と副会長のお二人となってしまう、木材関連の仕事に携わっている会員は殆どいません。最近では、「SNSで見た」として、入会を希望する若い方も現れるようになり、心強く感じています。

「木場の角乗」の最も基本的な技は「地乗り」です。地乗りでは、「タメ竿」と呼ばれる竹竿でバランスを



写真1：筆者による「金のシャチホコ」(撮影：関健一)



写真2：筆者による「足駄乗り」(同)

取りながら、前回し、逆戻り、角材上での逆立ち(「金のシャチホコ」)を行います(写真1)。「地乗り三年」と言われるように、基本技を身につけるまでには、通常、三年程度かかります。

角乗の難しさは、角材が、水上では角を上にして三角形(△)の状態で浮く点にあります。人間が角材に乗るときには、角材を平ら(□)にして立とうとしますが、角材は三角形の状態に戻ろうとするので、その回転力を抑える必要があります。この回転力を抑えて、角材を水平に保つこと「タメる」と言い、まずは「タメる」ことを習得する必要があります。

また、人間が角材を回すと、角材は手前方向に回転して、後ろに進むというもの、難しい点です。

より高度な技としては、一本の角材に二人で乗る「相乗り」、下駄を履いて乗る「駒下駄乗り」「足駄乗り」(写真2)、子供を肩車して乗る「川蟬乗り」、タメ竿なしに自分のバランス感覚だけで乗る「扇子乗り」「唐傘乗り」、角材の上に立てた梯子の上で曲芸を披露する「梯子乗り」、子供の乗った駕籠を二人で担ぎながら乗る「戻り駕籠」、お供えを置くための三宝を角材の上に三つ重ねた上で演技をする「三宝乗り」などの技があります。

披露の場では、技にあわせて、独特の「口上」と葛西囃子による「お囃子」が入り、技・口上・お囃子の三者が一体となって、角乗の技を構成しています。

3. 私と角乗

私が「木場の角乗」を習い始めたのは、今から24年前（29才のとき）になります。以前から、角乗のことは何となく気になっていたのですが、当時、たまたま、木場にある林野庁の官舎に住めることになったことから、「木場に住むなら、角乗をできるようになりたい！」と思い立ち、一般向けに行われていた体験講座に参加したことに始まります。

半年間、講座に通った後、「やる気があるのであれば、保存会に来てても良い」と言われたことから、翌年の5月から、毎週日曜日の練習に通い始めました。とは言え、保存会のメンバーは地元関係者が中心で、私は木場と何のつながりもない「よそ者」だったので、当初は、なかなか馴染むことができませんでした。このため、練習日の朝には、誰よりも先に集合場所へ行って、やる気を示すことなどにより、徐々に仲間意識を感じることができるようになりました。

練習では、水中に落ちることもしばしばあり、角材に体をぶつければ、青痣ができます。打ちどころが悪ければ、骨折することもあります。私も、これまで、下駄の練習で、二回、肋骨を折りました。

それでも、これまでの練習の積み重ねにより、徐々に技のレベルアップを図ることができ、今年の披露では、最も難しい技の一つである「唐傘乗り」を披露することができました。始めた頃には、「どうすれば、あんな技をできるようになるのだろう？」と思っていたので、無事に披露できたことに感無量でした。角乗の魅力は、「練習を重ねれば、必ず上達する」という点にもあると思います。

いつの間にか、どちらかと言うと「教わる側」から「教える側」となってしまいましたが、川並たちの「誇り」を後世に伝えていけるよう、これからも微力を尽くしていきたいと思っております。

おわりに

「木場の角乗」は、木材の水上輸送の歴史を伝える貴重な文化遺産であり、木場を発祥とする東京の木材産業にとっても、象徴的な存在であると思います。

東京木材問屋協同組合をはじめとする木材関係者の皆様には、是非、「木場の角乗」の次代への継承に向けて、ご支援、ご声援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、練習は、5月の連休後から10月の「江東区民まつり」の前まで、毎週日曜日の9時から11時に、都立木場公園のイベント池で行っておりますので、ご興味のある方は、お気軽にお立ち寄り下さい（体験もできます）。

（参考）昨年10月の「江東区民まつり」における角乗披露の動画

